様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ４ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４４２９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０６８６

研究課題名（和文）宗教的ニューカマーの研究――日本における外国籍住民の宗教への社会学的アプローチ

研究課題名（英文）A Study on Religious Newcomers : Sociological Approach to Religions of the Foreign Residents in Japan

研究代表者
三木　英（MIKI, Hizuru）

大阪国際大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：６０１９９９７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：日本における在留外国人の数が増えるとともに、日本人には馴染みの薄い様々な宗教が国内に活動を展開するようになってきている。本研究はその実態を明らかにしたものである。
イスラーム、台湾仏教、ベトナム仏教、上座仏教、韓国系キリスト教、ペルー系福音主義的キリスト教、フィリピン系の新キリスト教などがその宗教的ニューカマーで、1990年代以降のそれらの伸張は目覚ましい。日本における宗教多元化は進行している。このことも、本研究は指摘するのである。

研究成果の概要（英文）：As the number of foreign residents in Japan is increasing, there are appearing various religions which are unfamiliar to Japanese people. It is such realities that this study had discovered. The religious newcomers such as Islam,Taiwanese Buddhism,Vietnamese Buddhism, Theravada Buddhism,Korean Christianity,Peruvian Evangelical Christianity, Philippine Christianity and so on, have been developing since 1990's. This study also made it apparent that Japan is just becoming religiously pluralistic.

研究分野：宗教社会学

キーワード：在留外国人　イスラーム　ニューカマー仏教　ニューカマーキリスト教　ハラール　エスニック・チャーチ　多文化共生

１．研究開始当初の背景

1990 年代以降、日本に移住してくる外国籍の人々の数は目立って増加してきている。南米出身者（日系ブラジル人やペルー人）がその代表格であるが、フィリピン人、ベトナム人の増加も顕著である。その他にも、インドネシア人やパキスタン、バングラデシュから来日する人々も増えてきた。隣国・韓国からも、1989 年の海外渡航自由化以降、数多くが来日を果たすようになってきている。

この四半世紀の間に増えた日本への移民は、ニューカマーと総称される存在である。そして来日するニューカマーの数は、今後、右肩上がりに増えてゆくと予想される。日本政府は外国人労働者の受け入れをポジティブに考えているからである。受け入れの理由は 1990 年当時と変わらず、日本における労働力不足の解消のためである。少子高齢化が深刻化し、また高学歴化も進行した結果に、働き手の不足に悩む労働現場が現れてくるようになってきている。その不足分が、海外出身のマンパワーによって埋められようとしているわけである。

時代の抗いがたい趨勢というべきであるが、本研究はニューカマーの多くが信仰心豊かな人々であることに着目した。南米出身者にはカトリックあるいはプロテスタントのキリスト教徒が多く、フィリピン出身者はその大半が熱心なカトリック信者であることで知られ、ベトナム人には仏教徒が多い。インドネシアやパキスタン、バングラデシュ出身者の大半は、いうまでもなく、イスラームの信者である。そして韓国からのニューカマーのなかにキリスト教徒が占める割合は高く、さらには宣教のため来日してきた韓国人牧師も少なくない。

信仰心は、当該人物の価値観の基となる。そして価値観を理解する（し合う）ことは異文化間コミュニケーションの基となるものであろう。日本人がニューカマーたちとの良好な関係を築こうとする限り、彼らの価値観を知ることは必須であり、延いては彼らの宗教を知る必要があるだろう。

本研究は、宗教的なニューカマーの急激な増加を背景として立案され、実施されたのである。

２．研究の目的

ニューカマーたちが来日後、国内に教会や寺・礼拝所を設けてそこに集まっていることは、研究者間では既に知られており、断片的な情報の交換がなされていたところであった。

（１）しかし情報はあくまで断片的なものにとどまり、その（宗教的ニューカマーの）全体像については、どの研究者も正確に把握できずにいたところであった。本研究がまず目指したのは、その全貌の解明である。どういう（日本人には未知の）宗教が来日しているのか、それらはどんな活動を日本において展開しているのか、それらを奉じるのはどのような人々であるか、そして何処に、幾つ、ニューカマーの信仰拠点（教会、寺、礼拝所他）が築かれているのか。三年の研究期間で出来うる限り見つけ出し訪問して、基本的データの集積を目指したのである。

（２）宗教的ニューカマーの信仰拠点は、人里離れたところに設けられはしない。ニューカマーたちがそこに通うにあたっての利便性を考えれば、彼らの多く住む地域社会の中に築かれねばならない。

とはいえ、このことが当該地域に暮らす日本人たちを当惑させるものであろうとは、想像に難くない。ニューカマーたちの経済力を考えれば、信仰拠点を新たに建造することは多額を費やすために難しく、既存建物がそれへと改装されることになろう。となれば、日本住民にとり、馴染みのない宗教の施設が突然に近隣に姿を現すことになる。しかもそこに外国人が多数集まり、理解できない言語で語り合うという場景を、住民たちは目にすることになるのである（日系ブラジル人は外見こそ日本人と変わらぬ者が多いが、彼らの母語はポルトガル語である）。ここに、日本人たちと宗教的ニューカマーたちとの間に緊張状態の生成する可能性が指摘できそうである。

ニューカマーの側に、日本人との対立・緊張に頓着しない傾向があるとは、到底思えない。逆にニューカマーは、日本社会に協調してゆこうとするだろう。日本人側の驚き、ニューカマー側の協調姿勢、この異なるベクトルの存在が予想されるなか、現実的に両者の間にはどのような社会関係が構築されているのか。その実際に迫ることも、本研究の大きな目的としたところである。

３．研究の方法

ニューカマーの多く暮らす地域に赴き、そこに設けられた信仰拠点を探し出し、催される集会あるいは儀礼に参与して観察し、参加者への聴き取りを実施すること、これが基本的な研究方法であった。

宗教的ニューカマーの研究に取り組む研究者は若干ながらおり、その研究成果から情報を得つつ、またインフォーマントへの聴き取りを重ねるなかで得た未知の施設についての情報を頼りに、現地訪問を繰り返して研究は遂行された。ウェブ・サイトのなかで検索を繰り返し、情報を収集することに努めたことはいうまでもない。ニューカマーとはいえ、彼らのなかに日本で仕事に従事することによって日本語能力を身につけた者は少なくなく、彼らへのインタヴューにおいて支障を感じることは殆どなかった。日本語に堪能でないニューカマーには英語によりインタヴューを実施し、時にインドネシア出身の大学院生を伴い、彼に通訳の役割を委ねたこともあった。

また、研究を進めるなかで、日本における

宗教的ニューカマーの特質を浮き彫りにする必要性を感じ、韓国及び台湾にフィールドワークを行っている。韓国・台湾とも移民労働者を多く迎え入れており、その彼らが現地に宗教的拠点を築いていることは、日本と変わりがない。国民とニューカマーとの社会関係に考察を及ぼそうとする本研究にとり、両国で調査して得られるデータは、比較対象として有効と確信してのことである。海外調査に際しては、ネイティブ・スピーカーの若手研究者あるいは現地に留学している日本人研究者に協力を要請し、そのアシストにより円滑に調査を遂行することができた。とりわけイスラームの展開に関し、日本との大きな違いを明確にすることができたことは収穫であった。韓国・台湾政府による移民への施策と日本のそれとの違いを実感できたことも、大きい。

４．研究成果

日本国内に築かれた宗教的ニューカマーの拠点を相当数訪問し、その現状を微細なレベルまで捕捉することができた。隈なく調査したとはいえないが、首都圏・東海地方というニューカマー集住地域には足跡を残しており、「全貌」に近い程に対象に迫ることができたはずである。以下、宗教的ニューカマーをイスラーム、ニューカマー仏教、ニューカマーキリスト教に三分類し、各々に関し明らかにしえた諸事実を記述する。

（１）イスラームの礼拝所すなわち（モスクと称されることが一般的である）マスジドは既に国内に 90 ヶ所以上成立していた。本研究期間の三ヵ年にも幾つか新たに開堂されており、その伸張を本研究はあらためて明らかにすることになった。とりわけ、全国各地の国立大学に留学して研究に励むイスラーム教徒すなわちムスリムが大学近辺にマスジドを設けている事実は、いずれマスジドの存在しない都道府県の存在しなくなることを予想させる。日本人の知らぬ間に、イスラームは身近になっていたのである。

マスジドに祈るために訪れるムスリムは、近隣住民への配慮において手厚い。ゴミ出しルールを守り、音が建物外に漏れないよう気を配る。そして祖国の料理を日本人に賞味してもらおうと招待し、イスラーム文化講座、語学講座他も開催している。イスラームを日本人にも知って欲しい、という思いからのことである（その背景には日本人があまりにイスラームに無知であるという現実がある）。とはいえ、ムスリムの思いに応える日本人は殆どいないのが現状であった。その結果、マスジドはいわば陸の孤島の如きものとなり、異（宗教）文化間コミュニケーションは殆ど展開されてはいない。

本研究は、こうしたアンバランスな関係がいま、国内のマスジド周辺で見られるという現実を示している。

（２）日本の宗派に連ならない仏教の寺院もまた、国内にいくつも創建されるようになった。台湾仏教寺院がその主なるところであるが、本研究はそれら寺院が中国語圏出身者の（とくに女性の）ための社交の場としての性格を色濃く持つようになってきたことを指摘している。忘年会のようなエンターテインメント要素を寺の行事に組み込むことで、寺は信者たちの心の安定に寄与しているのである。

ベトナム仏教寺院も、ここ 10 年の間に四ヶ寺創建されていることを本研究は確認している。ベトナム人の日本への定着は、難民として来日してきた 1970 年代に遡ることができるが、そのときから長い時間を経てようやく、彼らの寺が相次いで出現してきているのである。彼らが日本で安定した生活を営むには時間が必要だった、ということなのであろう。さらに加えて、難民二世（あるいは三世）のアイデンティティの危機もまた、寺院をつくる（つくらねばならない）動因として作用したようである。若い世代を敢えて育成してゆかなければ、彼らの意識は祖国から離れるばかりで、ベトナム人の心を持つ人間にすることはできない。急がねば、若い世代は日本人化してしまう。その焦りが、在日ベトナム人が気軽に集結しうる施設である寺院の開創を促したのである。

以上の仏教寺院に日本人の姿はほとんどないが、スリランカ人僧侶の主導する上座仏教の集会には日本人ばかりが集まり、瞑想実践を行っている。（同国出身者が集いがちな）宗教的ニューカマーの施設には、稀有なパターンである。働き盛りとみられる日本人が数多く結跏趺坐する光景は、現代日本人の迷走する心の状態を示唆するかのようである。精神的救いを求める現代日本人が宗教、しかも上座仏教を支持しているという現実は、宗教的ニューカマーと日本人との関係の将来を考えるにあたり、有効な題材となりうるであろう。

（３）そして本研究では、ペルー人が集まるペンテコステの集会にも迫った。参与観察からは、彼らがキリスト教信仰によって結ばれた小さな擬似家族を形成して、異国での生活に適応しようとしている状況がうかがえた。生活戦略としてのキリスト教、しかもペルーではまだ少数派であるプロテスタント（ペンテコステ）に献身することを在日の彼らが選んでいるという現実は、ニューカマーにとっての信仰の重要性を示唆していよう。

また韓国から送り込まれた宣教団が活発な活動を行って着実に勢力を拡大しつつある事実にも、本研究は着目している。国内にいくつも設けられた韓国系キリスト教会には、韓国出身者にとどまらず日本人の姿も見られるようになってきている。現在の日本キリスト教界は韓国からのニューカマーによって支えられる部分が大きくなってきている。この現実も、本研究の明らかにしたところである。

そして敬虔なカトリック信者が多いはずのフィリピン人の間に、フィリピン発祥のキリスト教系新宗教が徐々に浸透しつつあることも、本研究は見出した。創始者のフィリピン人を「神の最後の使い」とする点で極めて濃厚にフィリピン的である新宗教が、これである。さらに旧ソ連諸国出身者が自らのアイデンティティを守るため、日本国内の正教会へのコミットメントを強めていることも、見出している。

祖国とのつながりを保ちたいとの志向が、こうした現象を成立させるのであろう。宗教的ニューカマーは日本で、日本人・日本社会に適応して、日々を送ってゆこうとしているはずである。ただ、祖国の宗教とのつながりが重要なものであることも、ホスト社会の側は看過してはならない。日本人には馴染み薄くとも、ニューカマーにとって生命線とも目しうるものだからである。

三年に亘って実施してきた本調査研究の成果は、「移民と宗教」研究の分野における最先端にして最も包括的な仕事として位置づけられるものとなったと、自負している。日本における今後の宗教的ニューカマー研究は、本研究の成果を参照せずしては行えないものとなろう。

もっとも、研究とは進めれば進めるほど対象の「深さ」に気づかれるもので、満足のゆくレベルをクリアできたと自認している本研究であっても、いま顧みれば、一層に深化させるべき余地は多々あったと反省するところである。今後は、宗教的ニューカマーたちの深部に迫ってゆくことを目指し、新たな気持ちで調査対象に向き合ってゆく。そして、未踏の調査地に出向いて未知の宗教的ニューカマーを調査し、真の意味での国内における全体像を描くことに挑戦してゆく所存である。

蓄積される研究成果は、多（宗教）文化化しつつあるこの国の未来への指針を定めるにあたり、有益なものになりうると確信するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

三木英、日本におけるイスラームの受容？、『UAE』日本アラブ首長国連邦協会、査読無、56 巻、2014、26-29

６．研究組織
(1)研究代表者

三木　英(MIKI,Hizuru)
大阪国際大学・グローバルビジネス学部・教授
研究者番号：６０１９９９７４

(2)研究分者

沼尻正之(NUMAJIRI,Masayuki)
追手門学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：　１０３００３０２

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：